

硫黄資材を施用しても秋落ち発生リスクが低い 水稻の硫黄欠乏症対策



開発のねらい

近年、水稻栽培で問題となっている硫黄欠乏症対策には硫黄成分を含む肥料（以下、硫黄資材）の施用が有効です。しかし、硫黄成分を施用すると水稻に有害な硫化水素が発生し、秋落ち症といわれる生育障害が発生する危険性が高まります。そこで、硫黄資材を施用しても秋落ち発生リスクの低い土壌管理方法を確立しました。

新技術の概要

- 硫黄資材を施用しても、稲わらを秋にすき込み、適正な水管理（中干し、間断灌漑）を行うことで秋落ち発生リスクを低下させることができます。
- 土壌の遊離酸化鉄含量が適正範囲（1～2%）を下回る場合は、上記の管理を行っても秋落ち発生リスクが高まるため、鉄を含む肥料を施用します。
- 硫黄欠乏症対策と秋落ち発生リスク抑制の両面から、硫黄資材として畑のカルシウムの施用量は60kg/10a程度、施用時期はなるべく田植え時期に近い、田植え1か月程度前が望ましいと考えられます。

活用場面

硫黄欠乏症（生育初期の茎葉の黄化や分けつの停滞などの生育不良）が発生した水田で活用できます。